

第54歩

玉藻よし讃岐国

「玉藻よし讃岐の国は国柄（くにから）か見れども飽かぬ神柄（かむから）かここだ貴き…」

有名な飛鳥時代の歌人柿本人麻呂の讃岐国を歌った長歌の出だしの部分です。現代語に訳すると、「玉のような藻も美しい讃岐の国は、国の性格によるのか、見飽きないことだ。神の性格によるのか、たいへん貴いことだ」というもの。

この夏、さぬき高松まつりに並行して、夜型観光の振興の一環として「玉藻あかり物語」と銘打ったライトアップイベントを玉藻公園で開催をしました。そのプログラムの中に、高松市出身の女性能楽師、伶以野陽子（れいやーようこ）さんの天守台の石垣の上での仕舞（しまい）とライトアップされた桜御門前の舞台上での舞囃子（まいばやし）があり、それを鑑賞しながら「玉藻よし」で始まるこの歌を思い出していました。各演目は、いずれも地元ゆかりの「八島（やしま）」と「海土（あま）」です。

「八島」は言わずと知れた源平合戦屋島の戦いまつわりの話で、旅の僧が一夜の宿を借りた翁（義経の亡霊）から戦いの話を聞かされ、僧の夢の中にも出てきて合戦の様子が語られるものです。

「海土」は、お隣のさぬき市の志度寺を舞台とする話です。藤原不比等（ふひと）（淡海公）（たんかいこう）の妹君が唐帝の後（きさき）になったことから贈られた面向不背（めんこうふはい）の玉が龍宮に奪われ、それを取り返すために志度の浦に住んだ淡海公が海土と結ばれ一人の男子（房前）（ふささき）をもうけたこと、そして子を淡海公の世継ぎにするため、自らの命を投げ打って玉を取り返したことを語りつつ、玉取りの様子を真似て見せた海土は、ついに大臣房前に自分こそが母であると名乗り、涙のうちに海中に姿を消した云々、といった話です。

いずれも能や舞の世界では極めて著名な演目であり、このような演目が後世に伝わっていることが、人麻呂の歌った讃岐の国の国柄や神柄の良さを象徴的に示しているように思います。だから讃岐国の枕詞は、「玉藻よし」という美しくも雅なものなのでしょう。

余談ですが、アマモなどの海草や海藻は、二酸化炭素の吸収源としても期待されています。ゼロカーボンシティの実現に向けて「玉藻よし」の讃岐の貴重な資源を最大限活かしていきたいと思います。

